

詩、踊る

CULTURE CITY OF EAST ASIA 2020 KITAKYUSHU "shi odoru"

通信 vol.2

世界的な舞踏カンパニー、大駱駝艦で活躍する田村一行は、高橋睦郎の詩『深きより 二十七の聲』に挑む。これは「連載詩」として、古代から現代まで詩歌や文学に関する二十七人の歴史上の人物達と高橋との対話が綴られるものだ。この「冥界との会話」というスタイルと共に鳴し「言靈を鎮める舞踏」を踊るという田村に、どのように挑んでいくかを聞いた。

文:乘越たかお(作家・舞踏評論家) Norikoshi Takao

詩:高橋睦郎 × 振付・演出・美術・出演:田村一行『深きより』

日本文学の歴史を生んだ二十七人の言靈を受け止め、鎮める身体を見よ

初めてこの詩を読まれた感想はいかがでしたか。

詩に限らず言葉は振付の段階でよく使います。形をなぞっただけの動きではなく、イメージによって実感を伴った動きを生み出すためです。今回のように他人の詩をモチーフに作品を創るのは初めてですが、「詩を前にして何ができるのか」は以前から考えていました。

『深きより』は一話完結で柿本人麻呂・紫式部・世阿弥・近松門左衛門……等、じつに多くの人が出てきます。はじめは各人の人物像が楽しく、とくに随所に現れる「待ち続ける」というイメージが強く残りました。しかし何度も読むうちに、作者の高橋さんが「巫(かんなぎ)」という立場で様々な亡靈達と会話していくという、全体の構造そのものに共鳴するようになりました。舞踏もやはり巫女のようない面がありますからね。

今回のプロジェクトには不思議な機縁を感じています。じつは今年の2月に亡くなった僕の父が英米文学の研究者なのですが、生前に出版した唯一の詩集のタイトルが『深き淵より(『DE PROFUNDIS』デュ・プロフンディス)』。これは旧約聖書の詩篇130「主よ、我、深き淵より汝を呼べり」が由来です。高橋さんに話を伺うと『深きより』というタイトルも同じだとわかり、驚きました。大駱駝艦の公演はもともと何かを鎮めるというような要素がある

とは思うのですが、今作は亡くなった父との対話、そして高橋さんの詩が振り起こした数々の冥界の言靈達を鎮める「言靈鎮め」のような作品にできたらと思っています。

一田村さんがチラシに抜き出した詩の一節は、この連載詩の最初の一人、稗田阿礼の章からです。古伝を口伝で伝えてきた自分は、『古事記』が文字で記されたあとヒルコ(最初に生まれた人間だが不完全なため海に流された)のようだとぞらえたりしています。

これを読んだとき、僕は言葉や振付になる以前のグシャッとしたものが深淵にいるイメージが浮かんだんです。僕も、創作時は作っては棄てるの繰り返しだが、いつも「棄てた方に良いものがあったのでは」と思ってしまう妄執も、「舞踏の深淵」に堆積していると思うので(笑)。形ないものが深淵の中でうごめいていて、それを呼び覚ます、大切な人との追憶みたいなところになっていけばいいのかなど。

一今回出演するダンサーは田村さんを含め男ばかり5人ですね。

はい。登場人物に小野小町や紫式部など魅力的な女性が多いので「男性ばかりの女性群舞」もいつか作りたい、などとたくさんのアイデアが浮かびました。ただ、有名な人々の

キャラクターをなぞるだけでは意味がありません。高橋さんが多くの対話の中で研ぎ澄ましてきた「言靈・言の葉」のリアリティを身体に宿して踊りたいと思います。

一高橋さんは作中で、詩歌の発生として「口承書承の発声の一回ごとに新たに生まれ立ち現れる」と古代びとは考えたのではと書かれています。これはコロナ禍の自粛を越えて、今回のプロジェクトが舞台芸術の魅力である「生の身体に触れる一期一会の大切さ」を伝えようとしていることに通じますね。

僕も自粛期間中は不安に駆られることがありました。でも結局、自分は踊るしかないのだと悟ることができた。大駱駻艦の主宰者である麿赤兒は「世界は矛盾に満ちている。その矛盾を引き受けるのは、身体しかない」と言っていますが、高橋さんは同じことを詩でやっているのではないかでしょうか。『深きより』の二十七人は、大いなる歴史の流れに翻弄されながらも書くことを止めなかった人々です。矛盾に満ち、その全てを内包するようなスケール感のある舞踏作品を作るつもりです。

東アジア文化都市2020北九州「詩、踊る」
11月7日(土)15:00開演
北九州芸術劇場 中劇場

極限まで研ぎ澄まされた踊り手の身体はどのようにつくられるのか? 心技体の秘密に迫る!

心

Q. リフレッシュ方法はですか?
メモの整理・ノートの整理・手帳の整理・本の整理・資料の整理などをして頭をスッキリさせます。

技

Q. 創作で大切にしていることは?
振りとして残らなかった部分や振りとしては現れなかった部分、また踊り手がどんな風景の中でどんなものに動かされているかというような見えない部分を大切にしています。

体

Q. 体づくりの為にやっていることは?
歩行移動、及び野口体操・らくだ体操など。また、現在は日々健康であることが体をつくるための何よりも基本であると考えています。

● 次回は
鈴木ユキオさん
インタビューを
お届けします